第 17 回動物介在教育・療法学会学術大会（2024.9.14.）

実践報告

猫との暮らしは寝たきり生活の高齢者にどのような変化をもたらすか

土田浩生 *

川田医院

How can living with a cat change the lives of bedridden elderly people?

Tsuchida Hiroki*

Kawata Clinic

はじめに

日本には寝たきり生活の高齢者が 300 万人以上いると推計され，この数は世界ワースト 1 位といわれている。その多くは医療および介護施設などでケアを受けながら生活をしているが，家族による介護と訪問看護・訪問リハビリなどの介護サービスを利用し自宅で暮らしている人もいる。しかし自宅ではリハビリやレクリエーションに限界があるため，実際にはテレビを見たりラジオを聞いたりしながら一日中坐位や臥位で生活している人が多い。その結果筋肉量が減少し筋力は低下し（サルコペニア），さらに ADL の低下や認知機能の低下，抑うつ状態が進行する（フレイル）。また介護する家族の肉体的および精神的負担も大きいため寝たきり生活の高齢者の増加は社会の大きな問題になっている。今日までに動物を飼育することが人の健康に有効であるという研究は多数あるが，寝たきり生活の高齢者が猫と暮らすことによって生じる医学的効果については報告が少ない。

目的

往診している寝たきり生活の高齢者が新たに猫と生活をすることになった。猫の存在がその高齢者の身体面および精神面にどのような影響を与えたかを報告する。

対象者と評価方法

対象者は両側膝関節症および認知症により ADL が低下しベッド上生活になった高齢者で，対象者の娘，訪問看護師，訪問理学療法士へのアンケート調査を行った。なお対象者やその家族，訪問看護・リハビリ施設は今回の発表に同意している。

経過と評価

対象者は両側膝関節症と認知症を患う 92 歳の女性。元々は家族の介助で川田医院に通院されていたが膝関節症の悪化で通院が困難となり定期往診に変更となった。2 階の自室でベッド上生活となりトイレ以外はほとんどベッドから移動せず，タブレットで動画を見て過ごす毎日だった。定期的に訪問看護師および訪問理学療法士が在宅でケアやリハビリを行っていたが全身の関節痛や体力の低下により ADL はさらに低下していった。対象者は犬が大好きで以前は飼っている犬と一緒に遊んでいたが，犬は 1 階の部屋で生活しているため階段を降りて会いにいく事が出来なくなり「寂しい」と話していた。そこで家族が「部屋の中で触れあえる動物を飼おう」と思い猫を迎え入れることを決め，性格などいろいろと考えた結果ミヌエットを選んだ。対象者は猫があまり好きではなかったが実際に飼ってみると猫をとても可愛がり笑顔が増えた。猫もとても懐き甘えん坊な性格のため友好な関係を築けた。猫を飼うまで対象者はベッド上で横になっていることが多かったが，猫じゃらしを持って腕を動かして遊ぶ，トリーツを与える時は指先で緻密な動作を行う，猫を撫でるときは椅子に移動して座り直すなど積極的に体を動かすようになった。また猫と遊んでいるときは関節の痛みが軽減していると話していた。さらに笑顔が増え，猫への話しかけだけでなく家族との会話も増えた。さらに隣の部屋にいってもっと猫と遊ぶという目標ができ，それに向かってリハビリを頑張る意欲が増した。訪問看護師や訪問理学療法士も猫の存在による療養面およびリハビリ面での効果を実感している。家族は対象者の身体的および精神的変化をとても嬉しく思っており，猫を迎え入れて大正解だったと

* 連絡先：pfpyc199@yahoo.co.jp

遊ぶ

撫でる

話してくれた。

感想・考察

動物を飼育する事は健康に良い影響を与えるといわれ，寝たきり生活の高齢者への ADL 維持・改善が期待される。最近では猫の報告もみられ，ふれあいや遊びの効果だけではなく「ゴロゴロ音」や「ツンデレ性格」についても研究されている。今回の対象者では猫と暮らすことで①痛みの訴えが減った②よく笑うようになった③家族との会話が増えた④意欲的になった⑤自発的に動くようになった⑥孤独感が減った，という変化がみられた。これは予想以上の効果と感じた。犬も猫も共通して肌に触れ合う心地良さやぬくもりを感じ情動面にプラスに働くが，犬と比して猫の方が「大きさや柔軟さがベッド中心の人にとっては距離感がよい」や「遊ぶ内容もほどよい動きでありリハビリとして安全」という意見があった。今後「自宅での介護」の増加が予想される。動物によって性格や環境が異なるため，種による利点や欠点を考慮して高齢者と家庭動物の両者にとって安全で幸福な関係を築いていく事が大切である。